

意見交換会

キーワード：メンテナンス、コミュニティ、街並み、ものづくり、職人

メンテナンスの促進

会場A: これまでは、「日本人はメンテナンスをしない」ということを国民性ですませていた気がします。高度成長期には、時間がなかったのでメンテナンスフリーの製品が好まれたこともありましたが、欧米並みに時間的にゆとりができてきて、大型日用雑貨店の進出やDIYの流行などで、メンテナンスできる環境が整っている気がします。実際自分でメンテナンスしている人はほとんどいない気がします。どうしたら、木製サッシに限らず住宅全般のメンテナンスをしていけるようになるのか教えてください。

松村: 現状では、家を建てるときに、メンテナンスは自分でするからメンテナンスできるように造ってくださいという人はほとんどいません。また、ご指摘のようにメンテナンスに費やすことができる「時間」と「お金」の差で比較すると、日本より欧米の方が優っていた時期もあるのは事実だと思います。

しかし、これからの日本の現状を考えると、少子高齢社会などを背景にして可処分所得は減るが自由に使える時間は増える傾向にあり、メンテナンスに係る時間的要因は欧米に近づいているといえます。また、安い値段で材料を供給する大型の日用雑貨店舗の進出などで、メンテナンスに必要な材料や道具の入手方が楽になってきています。これらの点では、メンテナンスを行える環境は年々欧米に近づいているといえます。

では、なぜメンテナンスをする人が増えていかないのでしょうか。この要因の一つとして考えられるのは、「のこ鋸を使って材料を挽くことができる」、「かなづち金槌と釘くぎを使って工作できる」という人が少なくなっていることです。

私が小さいときは、家の物置に鋸や金槌といった道具はもちろんのこと、いろいろな長さの釘もそろっていて、遊びの一環として工作というものを行っていました。また、中学校の技術という科目で木製の本箱や

いすといったものを楽しみながら作った記憶があります。私のような経験を積んだ方であれば抵抗なくリフォームに関わっていけるとと思いますが、日常的に工作する機会が失われてきている現代社会では、いくらリフォームしやすい環境が整ってきても、「道具の使い方も知らない」、「使った経験もほとんどない」人たちにとってはかなりの抵抗があると思います。

勇田: 私も全く同意見です。小さい頃は、障子や襖ふすまの張り替えなどは家族全員で行っていましたが、非常に楽しい思い出として記憶しています。メンテナンスを定着していくためには、自分でやることの楽しさを実感できるようにすることが大切だと感じています。また、子供の頃から訓練していると道具の使い方や材料の特性などが自然と理解できるし、なによりも親から子へと技術の伝承がスムーズに行えていました。現代の、「鋸や金槌といった木工道具が使えない」、「木に触れる経験が少ない」という子供たちを取り巻く状況下では、大人になってから急に木工やメンテナンスができるようにはならないと痛感しています。

また、現代の住宅であれば、メンテナンスをしたくてもするところが少なくなっていることも要因として考えられます。昔の住宅は、ほとんどが土壁や煉瓦や木のように時間とともに味わいがでてくる自然素材で造られており、いわゆる素人であっても簡単にメンテナンスが行えました。しかし、メンテナンスフリーといわれる最近の工業化製品は、いくら性能がいいといっても劣化は避けられませんし、使用頻度に応じて損傷は受けるものです。また、メンテナンスを前提に作られたものでないため、補修や修復は素人が容易に行えるものではありません。このような現状では、メンテナンスする人が急に増えることはありませんから、メンテナンスをすることによって、「楽しさ」や「お金れんがが節約できる」など良い部分をもっと実感できることが必要となってきます。

街並みづくりの方法

会場B: 旭川のウッドタウンをみると、家なみ、街並みが時間の経過とともによくなっていると感じています。

建物よりは、庭木や並木といった樹木の存在が大きいと思うのですが本当でしょうか。もしそうなら、住宅密集地など、庭の大きさや道路配置の関係で庭木や並木を植えること自体不可能な場合、樹木に代わって街並みをよくするものはあるのかどうか教えてください。

松村: 街並みと樹木の存在は大きく関係しています。また、個人の住宅レベルで樹木を植えることが難しい場合があるのもご指摘のとおりだと思います。旭川の場合だと、家を建てる敷地はだいたい200㎡程度ですが、決められた建坪率や容積率の限度一杯使って大きい家を建てる傾向があります。

平均世帯人数の推移をみると年々減少傾向にあるにもかかわらず、延床面積は増加しており、住宅金融公庫の統計では、139㎡の広さに3人にも満たない数で暮らしていることとなります。これは、子供が増えたときや両親と同居することなどを考慮して、人生の中で最大の人員を想定して家を建てているためで、エネルギー的、社会資本的にみても大変無駄なことです。スクラップアンドビルドの時代では無理だったかもしれませんが、中古住宅市場が成熟すると、世帯人数に応じた家に住み、世帯人数やライフスタイルが変化したらそれに見合った家に住み替えることが可能になります。

住宅を不必要に大きくつくらないことにより外部空間にゆとりができるので、庭木などを植えることや緑豊かなすてきな庭も可能となり、町並みをよくしているのではと考えています。

北海道の街並みの問題

松村: しかし、北海道の街並みづくりを論じる前に、北海道の街並みの問題点もあげておかなければなりません。

第一の問題は「車庫」です。

不必要に大きな家を建てている状況では、金銭的にも面積的にも、車庫を住宅に取り込んだり、景観に配慮した車庫をつくるような余裕が無く、市販のカスケード型などの車庫を道路際に設置するため、「街並み」というよりは「車庫なみ」という言葉が当てはまります。北海道の車庫の役割は、雨よりは雪の影響を排除するための意味合いが強く、車庫の除雪を楽にしたいので道路の際までもってきて設置することが多く、道路から見えるのは車庫ばかりとなります。建ぺい率

の制限がありますので、不必要に大きな家にしないことによりゆとりができた外部空間に車庫とアプローチを融合したものを木で造ったり、建築協定などで景観に配慮した資材による車庫の設置を誘導することで、街並みが明らかによくなると考えています。

勇田: 私も住宅設計をするうえで、カスケード型車庫の問題は大変気になっていました。敷地と建物の関係や周辺の状況を十分読みとってから設計を行うようにしていますが、カスケード型車庫で周辺が埋め尽くされていると、どうしていいかわからなくなります。車庫の色や形、車庫の配置などの要素が全く景観とマッチしていない状況が多く、これは単にコストの問題だけでなく日本人の美意識が変化してきているのかもしれない。また、木を植えると落ち葉がじゃまになるので植えないなど、個人的な価値観で街並みをとらえようとする傾向が強まっていることも事実です。

松村: それと、第二の問題は「屋根」です。

北海道の市街地に建つ住宅では無落雪屋根が増えていきます。実は、私の好きな街並みとして先に紹介した写真の家は、すべて傾斜屋根です。

傾斜屋根の善し悪しを街並みづくりだけで論じることではできませんが、私自身は傾斜屋根に魅力を感じています。傾斜屋根に魅力を感じている方でも、敷地と建物の関係などで無落雪にしなければならないと諦めていた場合が多いと思います。これも、不必要に大きな住宅にしないことで敷地にゆとりを持たせ、傾斜屋根にすることが可能になる場合もありますし、屋根に関して技術的な朗報があります。それは、傾斜屋根にしても雪を落とさなくてすむ屋根材の開発が進んでいることです。石をアスファルトで固めたような表面の材料で、^{かね}矩勾配でも雪を落とさなくすることができます。普通の屋根材よりは多少高価なものですが、傾斜屋根の普及と北海道における住宅地の街並みづくりに役立つものと期待しています。

道具の使い方を伝授する

会場C: 大学の非常勤講師をしているのですが、技術系の先生を目指す学生たちに、「釘を打たせる」、「鋸を挽かせる」といった作業をしてもらってもうまいかない場合があります。今後、経験を重ねることで熟練した技術になるとはいえ、時間的な余裕や教える人の数も少ない状況では、彼らが先生になって生徒に教える立場になっても技術が伝承されることに大きな期待は

できないと感じています。子供たちのレベルから教育してメンテナンスの意識を植え付けるためにはどうしたらよいのでしょうか。

松村:今の質問の答えにはならないと思うのですが、私は、21世紀は、職人の時代になるのではないかと密かに思っています。株や債権を動かしてお金儲けする人たちから比べれば、実際にもものを作ったり生産している人たちが一番幸せになれるのではないかという気がしています。

今ならまだ、年をとって仕事はしていないけれど腕に覚えのある人たちというのは、潜在的にかなりいると思われれます。一つの提案として、このような腕に覚えのある技術者や高齢者に社会の表舞台で再度活躍する場を提供することを考えています。しかし、題材として、いきなり個人住宅のメンテナンスということにはならないと思います。私は、公共空間や教育の場が一番の題材になると考えています。例えば公園は都市計画的に住宅地を開発する場合は、3%は必ず公園を造っていかなければならないことになっています。みなさんが住んでいる住宅地でも、身近な場所に小さな公園があるはずですが、これら公園は、ほとんど使われていないか、小さな子供専用の公園となっている場合が多く、お年寄りの方などが木陰でお弁当を広げたり、お茶を飲みながらくつろげるようなものではなく、雑草が辺り一面生い茂っていたり、ぼろぼろのブランコやシーソーなどが放置されたところが山ほどあります。また、公園に木製遊具がたくさん使われた時期がありました。行政の立場では、造るときにはお金がありますが維持管理のお金はほとんどもっていないので、一気に木製遊具が廃れた経緯があります。このような公園のメンテナンスにかかる費用は、材料費とかは微々たるもので手間代（人件費）がそのほとんどを占めます。このような場を、地域に住んでいる腕に覚えのある人たちに提供し手間代分を手当てしてもらるのであれば、「公園の再生」が図れるだけでなく、公園の補修や修復といった作業を通して、メンテナンスの仕方や楽しさを地域の子供から大人まで理解してもらうことが可能となり、「地域のコミュニティ再生」も同時に図ることができます。

しかし、現実問題として、腕に覚えのある人をそのような場に引き込むことが可能なのかとと思っている方も多いと思います。最近になって、子供の住教育の一環として、2坪の道具小屋を造る作業を岩見沢の小学生

に教えにいったことがあるのですが、そのときはリタイアした元大工職人来ていただいて指導に当たりました。多少傷をつくった子もいましたが全員大喜びで作業を行い、学校の先生が驚くほどの熱狂ぶりでした。しかし、それ以上に喜んだのは元大工職人のおじさんで、自分が教えることに子供たちが素直に応えてくれるので、職人としての誇りを改めて感じる事ができ、時に教えることの喜びを実感できたからだと思います。

これらのことから、題材を与えて腕に覚えのある人たちをうまく引っ張り出す仕組みを整えれば、喜んで参加してくれると思いました。

このように、街並みづくりといった公共の場や、道具の使い方や材料の加工方法といった教育の場を地域の人たちに提供することで、公園や広場の補修や工作入門といった実演の場を通して、子供たちから大人まで楽しみながらメンテナンスに触れる機会が増えれば、後進の育成ができメンテナンスできる人たちが増加していくのではないのでしょうか。

地域のコミュニティについて

勇田:公園については、NPOの景観プロジェクトでもたびたび指摘されており、造られた当初は整備されていても時間とともに荒廃していく公園が後を絶ちません。また、先ほどの提言のように、メンテナンス方法の伝授などは、地域のコミュニティというものが大きな鍵を握っていることは間違いありません。

しかし、私自身は、北海道という地域はどちらかといえば地縁・血縁が薄いと感じています。身近な「町内会」というコミュニティは、一昔前であれば非常に強い地縁関係が築かれていましたが、今ではどちらかという個人を束縛するといった半ば義務的な傾向が強くなり、楽しみながら協力して作業をするといった共同性が損なわれてきています。このような地縁に頼ったコミュニティでは、腕に覚えのある人たちとメンテナンスの仕方を学ぼうとする人たちの調整をしていくことは楽ではありません。しかし、趣味や考え方を同じくする人たちのコミュニティはものすごいパワーを秘めており、景観プロジェクトが行うワークショップでは、地域の枠を越えて参加者が集うことが多く、地域主体とは関係なく、街並み、景観を良くしていこうという熱意を強く実感できます。単なる話し合いで終わるようなコミュニティではなく、意欲や力を結集して実を結ぶことができるような新たなコミュニティづく

りが必要だと思えます。

メンテナンスできる素材の提供

会場D:住宅の中を見渡すと素人ではメンテナンスのできない素材が多いと痛感しています。

今後、木材のようなメンテナンスできる素材を、「住宅のどこに、どのように」に提供していけば良いのか教えてください。

松村:私は、中間領域の部分が鍵を握ると考えています。

住宅の内装などは、仕上がりの精度が求められたりすることから、メンテナンスの対象として普及するのは難しいと思います。一方、外に目を向けると、ガーデニングが大変なブームで木製エクステリアが所狭しと並んでいる光景をよく見ます。室内の住環境も向上した今の住宅では、屋外での生活を楽しむゆとりができてきたことの証だと思えます。これからの住宅では、「外の影響を受けないシェルターの役割」に加え「内と外をいかにつないでいくか」が大きな課題です。デッキでバーベキューをしたり、パーゴラの木陰で読書や

お茶を飲んだりといったくつろぎの空間には、時間とともに味わいがでてくる自然素材がマッチします。「多少ラフな作りでも」、「釘が曲がっても」「塗装にムラがあっても」性能的に大きな問題があるわけではないので、メンテナンスといった作業が誰にでもできます。

最後に

司会:経済の発展、生活水準の向上を目標に活動してきた結果として、私たちは物質的な豊かさを手にすることができましたが、私たちを取り巻く環境は、それに比例して悪化の一途をたどっています。物質的側面ではとらえることのできない環境や健康といったものがしるにされてきた結果、文化や生命そのものが脅かされてきているような気がします。

今後、精神的にも快適な生活を享受するためには、材料と人間の関係、文化と環境の関係などを正しく評価し、豊かな生活を演出していく取り組みが重要な役割を担っていくものと考えております。

(司会・文責 林産試験場 平間 昭光)

コラム

窓のメンテナンス

窓のメンテナンスに、皆さんはどんなことをされているでしょうか。

木製サッシの場合、すぐに思い浮かぶのは、塗装でしょう。塗装は2～3年に1度塗ればよいとよく言われますが、より良い状態を保つには、毎年春先に塗装がはげた部分を塗る必要があります。特に、下枠水切り部分は痛みやすいので、頻繁に塗ると良いようです。

また、塗装だけではなく、気密材の欠落や変形によって気密性が低下しますので、可動枠の四周(障子)に手をかざして、冷気を感じたり、外の音がはっきり聞こえるようになったら、気密材を取り替える必要があります。

それ以外にも金具を取り付ける木ねじがゆるんで、障子部分がたれさがる、例えば障子の四周の隙間が均一ではなくなった場合、木ねじの増し締めをすると良くなる場合があります。

窓のメンテナンスをするための第一歩は、いつも窓の動きを見ておくことです。少し注意するだけで、上記のメンテナンスをするタイミングが見えてくるものです。

なお、軒を深く(長く)すると、窓に雨や紫外線が当たりにくく、サッシの耐久性を向上させる効果があります。



軒の深い住宅の木製サッシ